



俺 0 0 0 1 3



book-fukunokami

## 焼き鳥

---

「俺もタレの焼き鳥を食うんだ」

俺は焼き鳥屋さんの前で叫んだ」

「俺もだ俺もタレの焼き鳥を食う」

隣の男が叫んだ」

「じゃあ俺は塩の焼き鳥にしよう」

隣の隣の男が叫んだ。

「なんだと、じゃあ俺も塩の焼き鳥にしよう」

「え、タレやめるのか？」

俺は叫んだ。

「そうだタレやめる塩にする」

「じゃあ俺もタレやめるぜ」

焼き鳥屋の焼き鳥焼き人が叫んだ。

「なにを言ってるだ焼き鳥ヤキニン、それじゃあ俺がタレの焼き鳥を食えないじゃないか」

「そうだ、今ここにあるすでに焼いたタレの焼き鳥で品切れだ」

「うっ、うっ、残念だ」

俺は悔しくなった。

「悔しいぜ、悔しいぜ」

「むむっ、なんか梅味の焼き鳥が作りたくなかった、おい、梅干しを買ってきてくれ」

「なんだと、俺が買いに行くのか？」

「そうだ、君だ」

「いやだ、俺はタレの焼き鳥が食いたい」

「そうか、じゃあ、俺が買いに行く、もう、店じまいだ」

「おいおい、俺達の塩の焼き鳥はどうなるんだ」

「もう、俺の梅味の情熱は変わらない」

塩味の焼き鳥の男二人残念だったのであった。